

練習問題 1 文学的文章(3)

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、(A)発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私のほかに一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、(B)、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようなのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじつと両手をつっこんだまま、そこには10 いてる夕刊を出して見ようと云う元氣さえ起らなかった。が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札15 口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、(C)中へはいって来た。と同時に一つずしりと揺れて、(D)汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水 20

車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は(E)ほっとした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて頼りな目をあげて、⑤前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のある鞆だらけの両頬を気持の悪いほど赤く火照らせて、いかにも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下がった膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。そのまた包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから、彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえもわきまえない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷の悪い何欄かの活字が意外なくらい鮮に、私の眼の前へ浮んで来た。(中略)

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅かされたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、いつの間

にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頬に窓を開けようとしている。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの鞆だらけの頬はいよいよ赤くなつて、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声を一しよに、せ45 わしなく耳へはいつてくる。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今将にトンネルの口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのも、すぐに合点の行く事であつた。にも関わらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとして考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸をもたげようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な眼でながめていた。

(芥川龍之介『蜜柑』)

注1 二等客車 当時、汽車は一等から三等までに分かれていた。

なお、当時の汽車は蒸気機関車である。

注2 倦怠 心身がつかれてだるいこと。

注3 日和下駄 天気の良い日には、齒の低い下駄。

注4 赤帽 駅で客の荷物を運ぶ仕事の人。

注5 懶い なんとなく心が晴れ晴れとしない様子。

注6 銀杏返し 髪型。いちよりの葉に似ている。

注7 萌黄色 黄緑色。
 注8 愚鈍な におろかな。
 注9 漫然と 目的もなく。
 注10 窓の戸を下そうとする 此の動作は窓を開けることを意味している。当時の汽車の窓は、一度上に向けて、下に落としこむ構造だった。

問一 () A S E にあてはまることばとしてもっとも適切なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。

(同じ記号は二度使わないこと。)

ア ようやく イ ただ ウ ぼんやり
 エ 徐に オ 慌しく

問二 線①「その時の私の心もち」とありますが、どんな気持ちですか。もっとも適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自分のほかにはだれも乗客のいない汽車の中にいる
 孤独な気持ち
 イ 今日に限って見送りの人があとを絶っていることを
 さびしく思う気持ち
 ウ 曇った冬の日暮れのように、どんよりと重たい、ゆううつな気持ち

エ これから汽車に乗って旅立つのだという、緊張した中にも希望でいっぱい
 の気持ち ()

問三

——線② 「眼の前の停車場がずると後ずさりを始め、突然電燈の光に変わって」とは、何がどうなったことを表している表現ですか。もっとも適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

問四

——線③ 「車掌の何か云い罵る声」とありますが、車掌は、だれにどんなことを言っていると考えられますか。

問五

——線④ 「ほっとした心もち」とありますが、「私」がほっとした心もちになったのはなぜですか。

問六

——線⑤ 「前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した」とありますが、「私」は小娘に対して、どんな印象をもちましたか。次の三点の「 」にあてはまることばを書きなさい。

・いかにも田舎者らしい、下品な顔だちを

・服装が不潔なことが

・三等の切符で二等客車に乗ってくる愚鈍さが

問七

——線⑥ 「するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって」とは、何がどうなったことを表している表現ですか。もっとも適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 汽車がトンネルに入ったこと

イ 今まで停電していたのが、やっと直ったこと

ウ 窓の外からすれちがう電車の明かりがさしこんできたこと

エ てていた月に突然、雲がかかったこと

問八

——線⑦ 「それ」はどんなことをしようとしていることを指しますか。わかりやすく書きなさい。

問九

——線⑧ 「永久に成功しないことでも祈るような冷酷な眼でながめていた」のは、なぜですか。もっとも適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 他人の失敗を見て自分の心をなぐさめたかったから。

イ 「私」は小娘に対して不快な気持ちを持っているから。

ウ 窓をあけると汽車のけむりが入ってくるから。

エ わけのわからないことをする小娘がこわかったから。

言語事項(6) ■慣用句・ことわざ

●慣用句

慣用句とは、二つ以上のことが結びついて、もとのことばの意味とはちがう意味を表すことばです。

① 体の一部に関係がある慣用句

【例】・足が出る || 予算がオーバーして赤字になる。

・手に余る || 自分の能力ではできない。

・口が軽い || おしゃべりである。

② 身の回りのものごとに関係がある慣用句など

【例】・板につく || いかにもびったりと似合う。

・さじを投げる || あきらめて見放す。

●ことわざ

ことわざとは、昔から人々の生活を通して言い習わされてきたことばです。教訓的なもの、皮肉・風刺的なものなどがあります。

【例】・急がば回れ || 急ぐときこそ遠回りになっても安全で確実な方法をとったほうがよい。

・氏より育ち || りっぱな人格を作るのは血すじよりも環境である。

・ぬれ手であわ || 苦勞せずに大もうけをすること。

・豆腐にかすがい || 手ごたえがないこと。

1 次の□にことばを入れて、()の意味をもつ慣用句を作りなさい。

①

を切る (関係をなくす。)

②

を細める (うれしそうな顔をする。)

③

を長くする (今か今かと心待ちにする。)

④

をかぶる (本当の性質をかくしておとなしくしている。)

2

次のことわざの意味をア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

①

石の上にも三年

()

②

石橋をたたいてわたる

()

③

飛んで火に入る夏の虫

()

④

朱に交わればあかくなる

()

ア

用心の上にも用心する。

イ

友達によってよくも悪くもなる。

ウ

危険なところに飛びこむ。

エ

なにごとにもしんぼう強くすれば必ずなしとげられる。